口てい疫から３年前に防疫演習

4 月 19 日 21 時 39 分

宮崎県内に大きな被害をもたらした口てい疫の感染確認から２０日で３年になるのを前に、再び口てい疫が発生したという想定で、感染拡大を防ぐための大規模な演習が行われました。

防疫演習は、３年前に発生した口てい疫の経験や教訓を自治体や農業団体などで共有し、再び発生したときに備えようと、宮崎県と小林市が合同で実施し、河野知事や担当者などおよそ１２０人が参加しました。
演習は、小林市内で和牛などを飼育している農家で口てい疫の感染が疑われる牛が２頭見つかったという想定で始まり、参加者は地図に消毒ポイントの設置場所を書き込むなどしました。
また、農場と対策本部を衛星回線で結び、スクリーンに牛の映像を映し出しながら、県の担当者が実際に口てい疫にかかった場合は、舌やひづめなどに症状が出ることを説明しました。
今回は、処分した家畜を埋める訓練も初めて行われ、重機で穴を掘って石灰をまいたり、シートを敷いたりしたあと、処分した牛に見立た袋を慎重に穴の底に降ろしていました。
宮崎県家畜防疫対策課の西元俊文課長は、「何年たっても口てい疫の発生を決して忘れることがないよう、今後も演習を続けていきたい」と話していました。